

「交流」から「混流」へ 文化人類学的手法によるまちづくり¹⁾

森 正 美

1. 文化人類学とまちづくり

文化人類学では、フィールドワークという方法を核にしている。そのプロセスでは、調査研究をするフィールドワーカーが、身体的経験のレベルを含んだ全体的な経験として、対象となる社会や文化と出会う。そして、その出会いの中から、対象となる「他者」への理解と「自己」への理解を認識論的な往復運動の中で深める。その運動は、フィールドワーカーが物理的にフィールドの外に出た後も継続する。

では、そこでの理解はどのような形で、認識枠組みから自己の体内の外部に表現されるのであろうか。言葉を媒介とした対象社会に対する記述である「民族誌」は、もっともオーソドックスな表現形態である。また、理論的な考察を主眼とするような論文を書くこともある。また最近では映像による表現も多用されるようになっている。

一方、地域政策の分野では、近年、地域振興といった場合に、経済振興中心の施策だけでなく、文化振興型の施策の重要性が見直されている（京都府 2002）。とくに文化政策の分野では、日本においても、まちづくりと文化との関係に関心が寄せられている。1980年代後半以降に多数の地方自治体によって文化施設が建設された。しかしその後の事業費や運営費は乏しく、いまだに地域の生活には縁遠い存在であることも多い。このような状況のなかで、地域資源の固有価値を再評価し、既存の制度を変

化させながら、芸術家と住民、企業、行政が協働してまちづくりを進めている例もある（後藤2001：205）。

また現代日本社会の抱える問題としては、若者たちのコミュニケーション能力の低下が危惧され、居場所づくりの努力が盛んになされており、そのために「交流」活動の持つ意義が大きいとされる（潮木2004、矢ヶ崎2004）。交流とは、異なる組織や系統に属するものの間で人が行き来することである。人が行き来するのであるから、そこには自ずと知恵、技術、情報等の交換が行われる（矢ヶ崎2004：10）。まちづくりでも、必ず人と人が出会い、そこでは様々な交流と交換がおこなわれている。

本論文では、筆者が日本国内で行ってきたフィールドワークから、2つの主な試みを取り上げる。それらはニュータウンの研究と、学生や卒業生と一緒にに行っている地元の宇治のお地藏さん研究である。これらのフィールドワークの成果を、一方はまちづくりのアイデアとして、もう一方は交流活動の実践として、社会に還元する方法を考える。後者に関しては、すでに実践中の活動を取り上げ、その意義を文化人類学的に分析し、従来の「交流 exchange」の中から新たなものを生み出す「混流 mix-change」という概念を提示してみたい。これらの作業によって、本論は、微細な生活世界の現実を理解する方法論を有した文化人類学の立場から、地域政策やまちづくりに貢献する可能性を具体的に明らかにしようとするものである。

2. 「文化」概念の再確認

「文化の薫るまちづくり」という関西文化学術研究都市（以下関西学研都市とする）のコンセプトがある。この文化を冠する関西学研都市のホームページには、学術研究都市として、文化が都市に根付いた文化の高い都市づくりを推進し、研究者と住民の交流を図るためにシンポジウムを行っているというまちの紹介とともに、ステージ上で演奏するオーケストラの写真が載っている。これが一般に流通している何か高尚なもの、何か高級なものという文化のイメージだろう。実際、文化人類学の概論の講義の最初でも、必ず文化の定義の一つとして、このような事例を取り上げる。

しかし、豊かな文化というときの文化は、

それだけではないはずだ。ライフスタイル、生活様式の微細なものの集合体に注目し、それが人々によって培われ継承されていく、そういうものを文化人類学では文化とよぶ。このことから通常は「文化」とまちづくりといった時に、人類学的な文化の概念とのズレがそこに組み込まれてしまっていることがわかる。

ただ一方で、その概念のズレを踏まえて、どのようにそのズレを修正し、まちづくりを文化人類学的に考えていくのかのヒントになるような資料もある。つくば都市振興財団によって2001（平成13）年に実施された住民アンケートが、それにあたる（図1）。まず、文化のイメージとしては、「音楽、演劇、美術、文学などの芸術活動が盛んなこと」を半数以上の回答者が挙げている。そして、「古い建物などが保護・保存

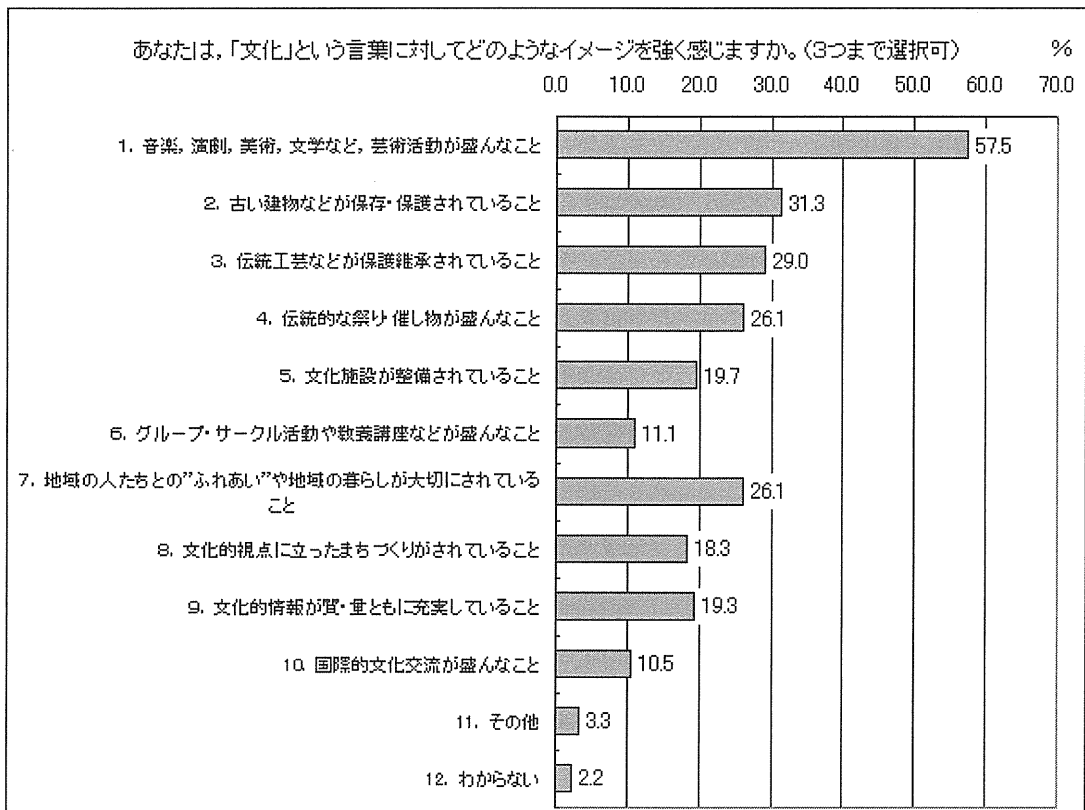


図1 つくば学研都市における地域の文化イメージ（つくば都市振興財団 2001年調査）

されていること、伝統工芸などが保護継承されていること」がそれに続いている。これらの項目は、先述の関西学研都市におけるオーケストラと同様に、「高尚な」文化のイメージにあたるだろう。

だが私がここで注目すべきだと考えるのは、7番に挙げられている「地域の人たちとの“ふれあい”や地域の暮らしが大切にされているということ」である。この項目が、文化のイメージとして、かなりの割合で存在する。1番の項目が突出していることは通常の文化のイメージから考えて当然の結果と思われるが、生活者は日常的にいつも芸術活動しているわけではない。だから、そのような活動ではない日常の暮らしを文化として捉える割合が高くなっているのではないだろうか。この日常の暮らしには、人類学の定義する生活の集積としての文化があり、私が考える文化人類学的なまちづくりの可能性がある。

3. ニュータウンの人類学的研究から

これまでの3年間、ニュータウンでの人類学的な調査研究²⁾をおこなってきた。ここでは、以下の5点が明らかになった。まず、現在の関西学研都市計画でもまちづくりとの関係で議論されている「職住分離」の問題がある。都市の人口を吸収するためにニュータウンでは、働く場所と住まう場所は別々である、つまり住むということに特化した空間が形成されている。

次に、共有空間の共同性という問題がある。これは、現在では使われない児童公園、使われないブランコ、使われない集会所というものが何故こんなに沢山あるのだろうか、ということである。初期の公団団地である千葉県松戸市の常磐平団地という団地を訪れた際にも、集会所には全然人がいなかった。ところが住人の方の話では、昔は葬式や会合、またお習字の教室やサークルの活動で非常によく使っていたという。一方同

じ団地内で、初期の4階建ての中層の住棟が並ぶエリアでは、住棟間隔の広さを生かして花や木を植えたり、憩いの空間のようなものが自然発生的に生まれている光景を目にした。それは、世話をしている住人たちの家の前後でのこともあり、そこが期せずして、人々の共同活動空間のようになっていた。つまり、ここで言えることは、建築あるいは都市計画の立場からは、目的をもって空間を設計するが、その目的は現実によって裏切られる運命がその先には待っていることがあるということである。

3つめは、階層分離である。公団主導のニュータウンでは、分譲・賃貸、集合住宅・戸建てと多様な住宅供給を行い、ニュータウンという空間内での、住民間のソーシャルミックスが目指された。大阪の千里ニュータウンを訪れた際には、その計画概念はとても強調されて語られた。ところが、現実には賃貸住宅の住人と、戸建住宅の住人は、ゾーン化しているところがあって、ソーシャルミックスという当初の概念は崩れている。総中流社会といわれる日本の経済状況が変化している現在、この問題は今後もたいへん重要になる。

4つめは、同世代入居の同質性、急激な高齢化と少子化である。住人はだいたい同じ世代で入居する。日本の住宅取得システムと関係があるが、学校を卒業すると働いて結婚前から貯金し、結婚してから何年間かまた貯金して頭金を貯めて、金融公庫で融資を受け、何十年間か定年前までのローンを組み、定年前後で自分の家になる。労働と住宅取得のライフサイクルが重なっている。結果としておおよそ同じタイプの区画で似た価格のところに、同じような世代の住人が、同じような家族構成で入居するということが多かったし、現在も継続している。この問題点は、子供を育て賑やかな時はいいけれども、子育て空間が静かになり、極端な言い方をすれば、その後は一斉に介護空間に変わってしまうという同質性

である。遊ばれないプレイロット等がニュータウンのあちこちにあるのは、遊ぶ子供がいけないという問題とも結びついている。

もう一つは、多文化混淆の進行である。公団住宅に外国人も入居できるようになり、公営住宅にも多くの外国出身者が生活するようになっていく。またつくばや関西学研都市では国際的な研究機関などを誘致し、積極的に外国人を受け入れている。外国人が増えれば異文化摩擦が起きるので、それに対して地域環境の破壊だと認識し、外国人を排除したり無視したりする空気も否定的な反応としては存在する。しかし、一方では同じ地域住民として、多文化が交わる可能性を肯定的に捉えることもある。多文化混淆は、問題であり可能性である。

このようなニュータウンの都市計画の作業とはなにか。計画する側は、ある種の社会的な意味や価値を方向性として空間の中に具現化していこうとする。だがニュータウンの人類学研究では、その計画が裏切られている部分があることを明らかにしてきた。このことからいえるのは、ある程度の変化やズレを許容する遊びのあるシステムを基本的に最初から考えないといけないということである。これは計画や設計の根本否定になってしまうかもしれないが、具体的には中心設定型のゾーニング構造ではなく、どこが中心になってもいいようなネットワーク型に転換する発想が求められている。

4. ニュータウン「つくば」での生活経験

個人的な経験が、どこまで説得力を持つのかは、その脈絡とその経験を何の参照にしようとするのかによると思うが、ここでは、ニュータウンでの生活の豊かさを探る糸口として、筆者が学生として8年間を過ごした筑波研究学園都市でのニュータウン生活での経験を提示したい。

筑波研究学園都市は、1963年に閣議決定

され、1972年に入居が開始された。私が筑波での生活を送った1990年代初頭には、つくばの元の姿を知るためには、泥道を歩くために長靴を履いて通勤し、星空がとてもきれいだったというニュータウン創設時の記録を記した本を薦められるほどまでに、ニュータウンは開発されていた。大学寮に入居した私は、その建物のデザインを不思議に思った。部屋はとても狭く、ベッドと机を置いたらあとは洗面台が中であっておしまい、という広さだった。台所と洗濯場が、2階ごとに1箇所あり、風呂は巨大な共同浴場だった。だがその小さな部屋の前には、その部屋の何倍もあるコモンスペースのフロアがあった。ここは全く何の目的のために作られているのかが不明な空間であり、踊り場としては広すぎるし、ソファやテーブルなどのような休憩室用の設備があるわけでもなかった。しかし、私にとつての寮での最大の思い出は、そこに数物やテーブルを持ち出してみんなの都合のよい時に開いた食事会である。多様な専攻の、またいろんな国籍の学生が偶然寮の同じフロアに暮らし、狭い部屋に耐えかねて食事を外に持ち出してシェアしていた。常設の食堂を持つとか、定期的な集会を開くことは認められていないけれど、何となく声を掛け合い、一時的に食事という目的で集い、言葉を交わし、交流することを妨げられた記憶はない。これは不思議な、しかし今でも温かい記憶である。この建物のコモンスペースがどのような設計意図に基づいていたのかは、今でも謎であるが、今思えば、コモンスペースを通して、居住居間のゆるやかな関係性を生み出すという事例として捉えることができる。

建物の外にも、キャンパスの中に突然古い民家や栗の木が現れたりするゾーンがあった。どうやらそれらは、用地買収に応じなかった土地が、結果的には快適な残余空間として、潤いをもたらしているというものだったようだ。これも計画側からすれば、

買収の失敗だったものが、別の意味を持つようになり、良い形で計画が裏切られた例の一つであろう。

また、大学寮のあとには、ニュータウン周辺の旧村落の農家の離れに5年間住んだ。筑波学研都市は、行政的にはつくば市だが、住民は慣用的に新規開発地域に暮らす新住民と、旧村部に暮らす旧住民という分け方をされていた。よそ者の新住民でありながら、旧村落の一角に暮らしたことで、旧村落の居候のような存在になり、村づきあいのすみっこに時々加えていただいた。挨拶を交わし、一緒にお茶を飲み、おしゃべりをする。とれたての野菜を分けてもらう。日常の付き合いを深め、つくばは今でも私にとっては懐かしい場所、懐かしい人で溢れる場所になっている。実は、学生時代を筑波で過ごした友人たちにはそのような住まい方のまま、そのままつくばに住んでいる者が何人もいる。これは、旧村落の方達の文化のかけらを分けてもらうことで、ニュータウンという空間に折衷的な居心地の良さを見出した例といえるかもしれない。

5. ライフバランスとニュータウンの方向性

栄養バランスという言葉がある。体調を

保つために、身体に必要な栄養素を偏りなく摂取することが、それである。今回、ニュータウンを研究している途上で、これに似た言葉で「ライフバランス」という言葉を考えた。フィリピンでフィールドワークをしている時に、マニラに住み日系企業に勤めているフィリピン人の友人が私に、「日本人は、仕事が好きだね」と言った。これは私のことを指しているのではなく、彼の周囲にいる日本人のビジネスマンのことを指しているようだった。彼は「日本人は毎日すごく仕事をする。そして遊びも仕事の関係に入っていて、平日は職場で週末はゴルフ場で同僚と会っている。そういう状況で、家族との時間、親戚や地域の友人たちとの付き合いはどうなるのだ。全くバランスがとれていない」と言っていた。

この何気ない会話が、私には説得力をもって響いた。なぜならその調査の前に日本で訪れたニュータウンは、仕事は旧都市で、住まいはニュータウンでという職住分離の発想の上に成立してしており、仕事の帰りに職場の同僚と遊ぶので遊ぶ場所も都市、そして定年になったら初めて職場人間が地域デビューするという現象が起きていたからだ。そこでは、職・遊び・家族・地域の生活といったライフバランスが完全に崩れ

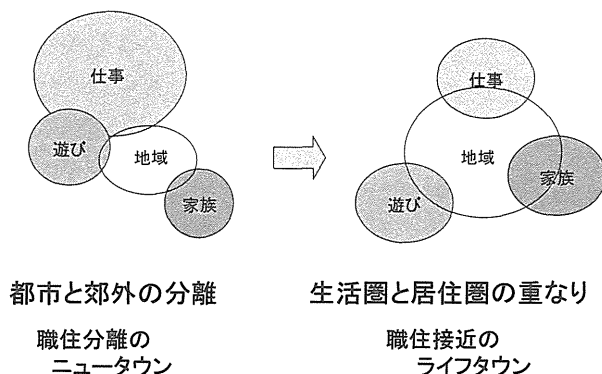


図2 ライフバランスとニュータウン

ていた。

「ニュータウンをライフタウンにしたい」と、高蔵寺ニュータウンのコーポラティブ住宅で出会った男性が語っていた。つまり生活圏と居住圏をできるだけ近づけ、重ね、職住接近のライフスタイルというものを模索したいという思いが生まれている。ライフバランスを整え、生活圏と居住圏をどのように重ねていくかは、ニュータウンにおいてのみならず私たちの生活上の大きな課題である（図2）。

実は、つくばでも東京などから週日だけの単身赴任の教員には、つくばは家族から離れて仕事をする無意味な場所で、負担の大きい生活だとみなされていたようだ。ところがつくばに居を構えている教員には、職住近接の理想が実現されている場であったようだ。充実したスポーツ施設や近隣にある自然を楽しみ、自邸を構える教員も大勢いた。もちろん、働き方の多様性の確保や働き方の価値観の転換を図るのは、それほど容易なことではない。しかし、少しずつ生活者の視点で、ボトムアップにできることから始めていかなければならないのではないだろうか。

6. ニュータウンにおける交流とまちづくりの提案

ここでは、以上のニュータウン研究での発見と経験を踏まえて、ニュータウンでの人と人の交流のしかけとまちづくりの方法について、参考例を検討していくつかの提案を試みる。

（1）都市居住の農村ライフと身体感覚共有空間

昨今、多くの自治体で、都市農村交流事業が盛んに行われている。農村部の過疎化、都市住民の自然体験の不足を踏まえ、青少年に対する教育効果や住民交流による地域活性化を目指した事業である。また、関西

学研都市での住民アンケート（京都府2003年実施）においても、学研地区で特に印象に残った場所として54.8%が「けいはんな記念公園」をあげ肯定的な評価をしている。また学研都市を居住地として選んだ理由にも、「町並みがよかったから」「自然が多い環境が良かった」が、それぞれ45.2%の高率回答を得ている。先に触れたつくば市でのアンケートの、文化的環境の満足度に関する質問でも、65%という高い割合で、公園や並木などの緑について満足しているという解答が得られている（図3）。旧都市とニュータウンの関係を考えた場合、空間的にも時間的にも過密な労働空間としての都市で生活時間の大半を過ごし、居住空間であるニュータウンに戻ったときには、緑のある安らげる環境を求めていることがこれらの資料からわかる。

また、篠原（2004）によれば、立替事業に着手している東京都の赤羽台団地での住民アンケートでは、意図的に公園としては作られていないけれど30年以上の年月を経た梅林などもともと「へた地³⁾」として残った部分が散歩道として高い評価を得ているという。高齢化が進み、わざわざ郊外に自然を求めて出かけることが体力的に可能でない住人たちにとって、身近な緑の持つ意味は大きい。実際、私が赤羽台団地の住人と会った時にも、年配の住人たちはもっと団地の緑を大切にする立替計画を実施して欲しいと語っていた。

このような結果を踏まえると、ニュータウンの計画のなかに、できれば最初から一定の遊びの空間、それが後にどのように使われるかが未知数の予定的残余空間を組み込むこと、また現存のニーズに合わせて都市的便利さと農村的環境を複合するようなしくみを検討する必要がある。

その際、重要になるのは、明確な目的がなくても使用できる共用空間の設置であろう。現存の共用空間である公共ホールや集会所は、その使用意図に適った用途でしか

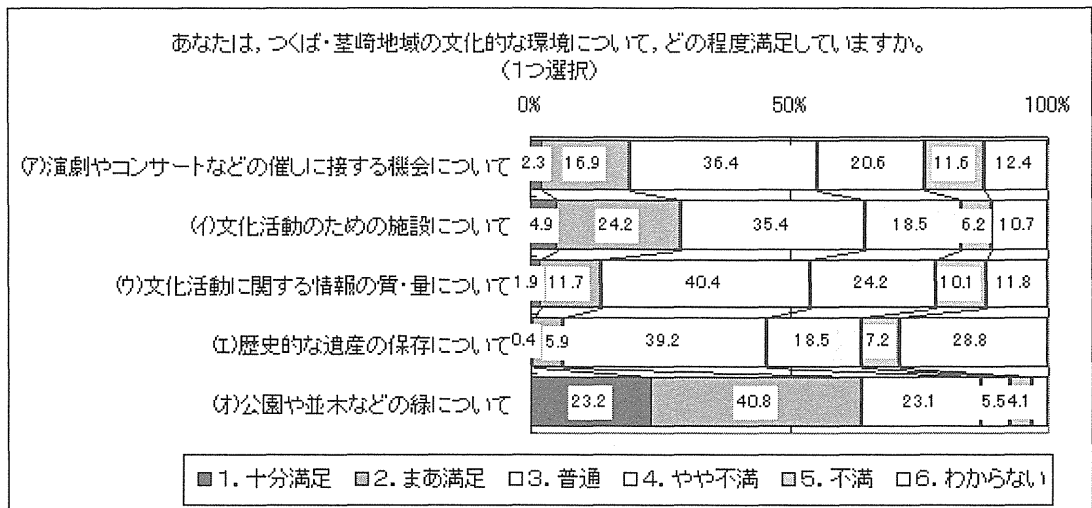


図3 つくば学研都市における文化的な環境の満足度 (つくば都市振興財団 2001年調査)

用いることができない。勉強会や習い事に使えても、ただの茶話会には使いにくい。ましてや飲酒を伴う宴会などを目的に集会所を使うというのも考えにくい。共に食べ共に語らうということをもっと促進し、身体感覚を共有する時間と空間が気楽に手届く場所に必要とされている。千里ニュータウンのひがしまち街角広場の試みは、全国的にも注目されているが、気持ちだけのお茶代をカンパし、一人でフラッとやって来られる。そこに来ればいろんな人や情報と出会える積極的な居場所の創出に成功している例であろう。

(2) 軒を貸す、軒を分かつ

愛知県春日井市の高蔵寺ニュータウンで、「Garden プチ市」のチラシ(図4)に出会った。公団の分譲地だった場所が半分の面積で民間分譲地として売り出されたのを機に、新しく入ってきた若夫婦が住宅の一階部分に土間を作って、ケーキ作りが好きな妻がケーキやパッチワークの小物を置いて売っている。それを見た以前からの住民の世代の違う女性たち2人と意気投合し、3人で庭先の芝生で「フリマみたいなも

の」を始めた。それが大変人気になって、毎月第三水曜日のたった3時間の開催を楽しみにしてくれる常連客がいるという。一度、雨降りの日に、客が来ないだろうと中止にしたら、その中止に対してたくさんクレームが来た。そのクレームで、こんなにも待ってくれている人がいるのだということを知り、すごく励みになった、と語ってくれた。今では、次のプチ市に何を並べるかを考えることも楽しみになっているという。小さなチラシを手作りし、手渡しで、口コミで輪を広げていく。この手法に私は、実感を伴う交流の可能性を感じる。

また、直接顔を合わせるわけでないけれど、何かささやかな満足と幸せを感じさせてくれるしかけが、無人100円ショップにあると思う。新住民と旧住民が重なる場所、たとえば農村と都市の境界道路沿いや住宅地の間に点在する農地の脇などに、農作物が並べられ、お金を入れる箱が設置されている。正式で継続的な商店ではないので、ショップを設置する側はそこに労働力を貼り付ける必要はないし、余剰を適切に処理することが可能になる。また、買う側は気を使わずに新鮮な作物を安価で入手できる。

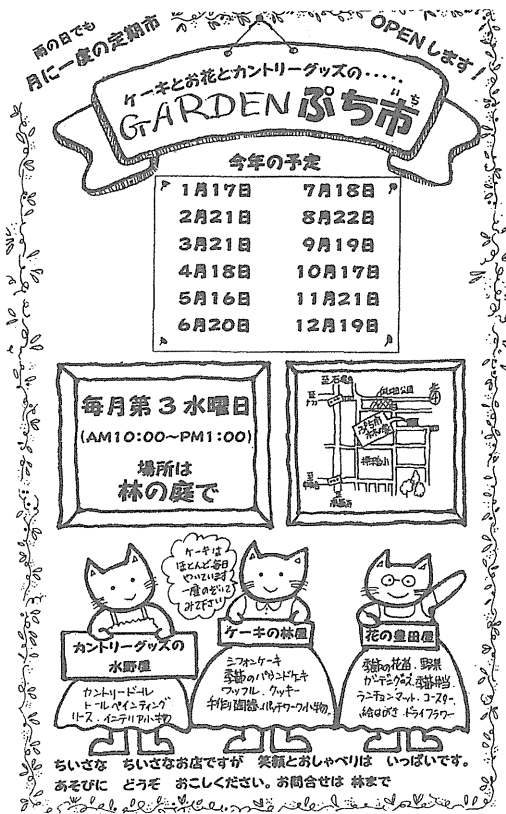


図4 ぷち市の手作りチラシ

作物の余剰を貨幣と交換している市場交換的な行為でもあるが、市場論理だけでは左右されない善意と信頼の交換が、そこには含まれている。そして、そのショップがもし持ち主の農地や自宅の脇に設置してあれば、ちょっと手を伸ばせば作り手に出会うこともできるのである。

似たような例としては、家庭で行われる個人の習字やピアノ教室がある。実は公団などや民間の集合住宅では、集合住宅内での営利目的行為を禁じている所が多い。とくに公団などのニュータウンでは、従来住戸空間はあくまでも居住のスペースであり、商業・サービス機能は、センター地区に集中されていた。ところが実際のニュータウンの聞き取りでは、女性たち、なかでもいわゆるニュータウンの昼間人口の担い手である専業主婦たちが、自らの教養として身

につけたピアノや習字をニュータウンの子供たちに教える教室を開いている例にいくつも出会った。それはボランティアではなく、料金を伴う交換だが、母親同士のネットワークの延長であったりする場合も多く、地域コミュニティが確固としていないニュータウンで人の出会いを生み出す貴重な場になっている。

このしかけを公式に認め始めたのが、いわゆる SOHO 機能付きの集合住宅の建設であり、その事例を、私たちは千葉県の幕張パティオスや、東京の東雲住宅など公団の先進的プロジェクトにみることができる。

一方、ここまで述べてように一時的な交流ではなく、居住の中に交流形態を組み込んでしまう仕組みが、コーポラティブ住宅ではないだろうか。「みんなの庭」を共有する高蔵寺ニュータウンのコーポラティブハウス「木附きの里」は、その一つの試みである。

あまり広くない土地にこだわりの住宅を共同でつくり、住民間の日常の往来が頻繁である。月に1度「ふれあいパブ」という持ち寄り飲食会を1軒のお宅の広い1室空間を開放してやっている。様々な世代の、それも住人以外の人でも大勢集まっていて、子供達だけ来ていて親は来てないというようなパターンもみられた。子供たちだけで参加しているので「お父さん、お母さんは？」と尋ねると「今日は出かけているから」と慣れた感じで答える。きっと幼い頃から慣れ親しんだ空間になっているので、親がいなくても自由に振舞えるのだろう。またその集まり自体も、特別にプログラムがあるわけではなく、食べて、飲んで、喋る。ただそれだけである。軒を分かち合う生活の場が、コミュニティサロンとしての機能を持つようになり、NPO 活動やまちづくりに携わっている人たちに口コミで伝わり交流の場になっている。

またこの会場を提供している住人の方は、「ここには、いろんな世代や形の家族が住

んでいる。だから上の世代が高齢化したとき、たぶんこのふれあいパブの会場は、共同食堂のようなものになっていくと思う」と話されていた。軒を分かつということは、そのように将来にわたって、生活の経験を分かつことなのだと、その言葉から理解することが出来た。

（４）記憶の形成、記憶の共有

「ニュートウンを故郷にしよう」というキャッチフレーズを高蔵寺で聞いた。故郷にしようと言ったときには子供はもう外に出始めている。それではダメだから、夏祭りを催すなど、子供が小さいうちからニュートウンという空間に「ふるさと」という心情的紐帯を伴うような意味づけをしようという取り組みだという。

人が、土地についての経験や記憶を共有することは、共同体の基盤形成と継続に大きな意味を持つ。先出の京都府実施のアンケートで、関西学研都市に移り住んで学研都市のイメージを尋ねたところ、25.8%の回答者が「新しい街が生まれるという予感をさせる」としている。そこには、漠然とした期待やこれから自分たちで何かを造っていくのだという思いが含まれているのだろう。経験を共有することで、遂行的にコミュニティは形成されるのだから、作っていくものには、ハードだけではなく、将来「ふるさと」と呼べるような人と人のつながりや地域での活動が含まれるであろう。

その取り組みとして非常に面白いプロジェクトがある。大阪の千里ニュートウンのひがしまち街角広場に集まる人達の有志、財団法人生活環境問題研究所の有志、大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻建築・都市計画論領域の有志によって進められている「千里の絵葉書を作る会」のプロジェクトである。千里ニュートウンの風景、クリスマスや桜の花といった季節感を表すもの、日常の街角の風景などの写真を絵葉書にし、1枚50円で販売した。そのなかで製

作者自身の予想を裏切って売れたのが、校歌を刷り込んだ学校の写真の絵葉書であったという⁴⁾。「千里の絵葉書を作る会」のホームページで大阪大学大学院教員の鈴木毅はこのプロジェクト自身が「地域の価値や魅力を元にして、日常的なコミュニケーションツールを制作する企画」と述べている。

このようなプロジェクトを、開発以前、開発途上の風景を対象に実施することが出来れば、その切り取られた風景が「典型的な」ニュートウン、そしてふるさとの表象として固定化される。そしてその表象を通じて、記憶が形成され、共有され、継承されていくのではないだろうか。表象の固定化は、記憶の画一化という危険性も孕んでいるが、個人の視点からの多様な表象を取り上げることで、個別の価値に光をあてることは可能だろう。

また写真という、時間を二次元に固定化するメディアは、現在の私たちが時間を遡る手助けをしてくれる。ニュートウン以前の土地の記憶を持つ旧住民の人々と現在の住民が写真を媒介として出会う。また初期からの住民と新しく移入してきた住民が写真を媒介として土地の記憶を共有する。そんな共同作業ができるのではないかと、千里のプロジェクトを知って考えた。

そのアイデアが実現されたのが、2004年7月31日に赤羽台団地で日本女子大学篠原聡子研究室が実施した「団地の思い出アルバム展」の企画である⁵⁾。団地の夏祭りに合わせて開催された写真展には、自治会のメンバーを中心に、懐かしい写真の数々、また古い浴衣やダイヤル式の黒電話など、生活の記憶を示すモノが集まった。アルバム展を観にいらっしまった方々からは、写真を前にして懐かしい思い出話を聞くことができた。少子高齢化の現在とは程遠い運動会の写真や、公園で撮られた少しかしまった三世代の家族写真が印象的だった。

その写真を前にしたミニシンポジウムにパ

ネリストとして加わった。住民の方々が、立替を前にして団地に対して様々な思いや願いを持っていること、またその思いや願いを実現する回路が乏しいことなどが熱心に語られた。写真展企画は、その写真を媒介に人が出会うことを目指していることを思い、その出会いの場が小さいけれど具現化したことに企画の意義を感じた。このような出会いが会場の外でも継続していくことや、集められた写真が担う記憶を多様な住民に伝えていく活動が望まれるが、集められた写真を小冊子にまとめるという計画があるということで、その冊子が新たなコミュニケーション・ツールになる日も近い。

(5) 情報ネットワークによるつながり

現代社会において交換される、最も重要なものの一つに「情報」がある。図5でつくばにおける「文化活動情報源」を示した。最も多いのが、「行政の広報」。つまらないと言いつつも、全戸配布で重要な情報も掲載されているので、皆結構読んでいます。待っていれば必ず手元に届くという行政広報は、サーキュレーションとしては圧倒的な力を有している。もう一つは地域情報誌

であるが、これもやはり郵便ポストに配布されるもので行政広報と内容は違うが、サーキュレーションの方法は似ている。

また最近注目されているインターネット上の情報ネットワークでは、幕張のベイトウンなどのサイトが面白い。頻繁に更新されていて、住民の参加するサークルの紹介が、各サークルの写真や活動内容、連絡先が掲載されている。さらに地域の最新イベント、ウェブショッピングモールもあって、ベイトウンの商店主がウェブ上にもお店を出している。そこでは、ヴァーチャルとリアルが繋がっている。リアルネットワークで繋がるといえるのは、実は労力もかかるし、問題も多い。とくに行政的な連携などはなかなか進まない。関西学研都市のように複数の行政単位がかかわっているようなニュータウンの場合には、まずヴァーチャルで境界をはずし、そこからリアルでも接続するという発想の転換があってもよいのではないだろうか。

情報ネットワークは、リアルかヴァーチャルのどちらがよいのかという二者択一のものではなく、多様な選択肢が用意されていることが重要である。なぜなら、たとえ

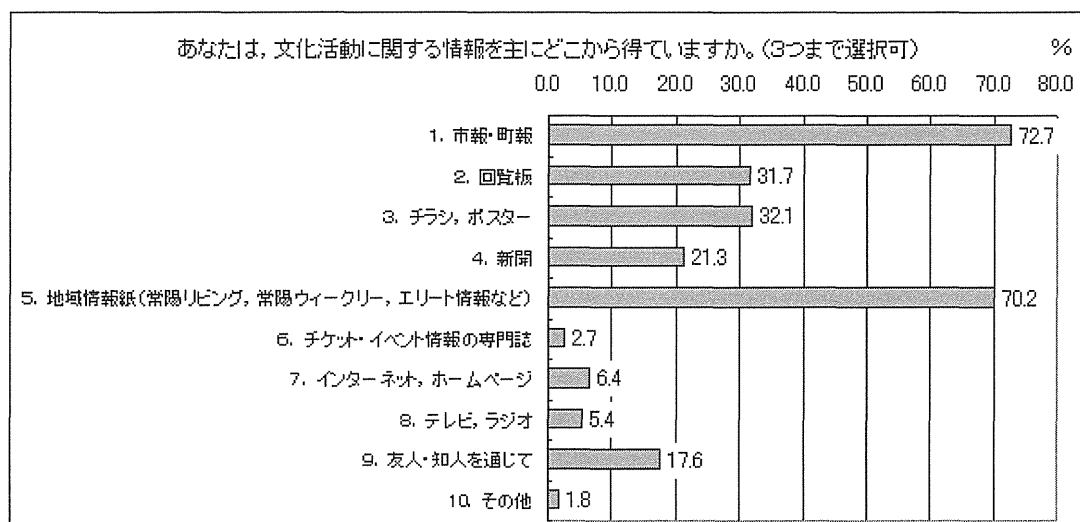


図5 つくば学研都市における文化活動情報源 (つくば都市振興財団 2001年調査)

ば子育てサークルに参加するお母さんたちの話では、子育てサークルに参加したきっかけは、「たまたま見たチラシや広報記事」だったという人が少なくない⁶⁾。子育て初期は、物理的にも精神的にも、家庭の外に出ることが難しい。それは密室育児などの問題を引き起こす誘因にもなっているのだが、そんな時「偶然」「たまたま」手元に届く広報情報や、戸内でも入手可能なネット情報は、貴重な出会いの扉に繋がっていることも多い。求める側の必然と、情報と出会う偶然の掛け算が新しい可能性を開くことから、その偶然は多いにこしたことはないのである。

7. 宇治におけるお地蔵さん交流

ここでは、2002年以来、学生や卒業生と一緒に続けている、京都府宇治市の中宇治地域のお地蔵さん調査を元にした活動の概要と経過を報告する。そして地域、商店街、大学をつなぐこの活動が、文化人類学的な調査研究内容の社会還元方法として目指す方向性とその意義について述べる。

(1) 「うじぞー組」のうじぞー調査

宇治市内でも、毎年8月の終わりになると、まちのあちこちで地蔵盆が行われる。その数日間は、街角にひっそりと佇むお地蔵さんが町内の人々の輪の中心に座す。このような地蔵盆行事は、関西を中心に盛んに行われている。京都に暮らすようになって以来、このような光景を目にし、「お地蔵さん」がとても気になっていた。

また大学の所在する宇治市の地域文化について、なにか学生たちと一緒に勉強をしたいと考えていた。そこで、中宇治地域にあるたくさんのお地蔵さん（＝宇治のお地蔵さん＝うじぞー）に注目し、卒業生の有志数名と勝手に「地蔵トライアングル」と名づけたエリアの地蔵の祠の所在特定調査を始めた。

2003（平成15）年4月からは、文化人類学科の教員と協力して、宇治市全体を「地域まるごとミュージアム」として捉え、人と人を結ぶ交流活動の実践にむけての研究⁷⁾に着手した。

そして同年8月には、4つの町内会⁸⁾の協力を得て、地蔵盆の調査や、各町内で守っているお地蔵さんについての聞き取り調査などをおこなった。2004（平成16）年も、さらに別の4つの町内会⁹⁾のご協力により、地蔵盆調査をおこなうことができた。これは、文化人類学のフィールドワークそのもので、関係町内との連絡調整、調査・質問項目の設定、資料整理、報告書作成という一連の作業を卒業生と学生有志で構成する「うじぞー組」¹⁰⁾が行っている。地蔵盆調査では、事前の聞き取り、準備、当日、後片付け、後日の補足調査と何度か足を運び、町内の方々との関係を少しずつ深める努力をしている。

この調査を行うグループは、中核になる卒業生と在学生在が7－8名、それを活動への関与の程度が異なるメンバーが緩やかに取り巻くというネットワーク型の構成になっている。教員である私は、活動計画を立てて指導するというより、学生と一緒にアイデアを出し自由に意見を交わす立場をとっている。ただし、大学に拠点を置く活動であるため、地域との関係のなかで必要が生じた場合には、教員である私が直接ご挨拶をさせていただいたり、お話を伺わせていただいたりすることもある。この調査を森ゼミの活動と命名するのではなく、「うじぞー組」名付けたのには、実は私なりの理由がある。一つは授業の枠を超えて、在学生に限らず、文化人類学科で学んだ地域文化研究の手法を通じて社会と関わり続けたいという思いを持つ卒業生も気軽に参加することができるようにすること、さらに授業としての義務ではなく学生の自主的な社会活動の意味を強調したかったからである。そして、その社会活動の目指すところ

は、文化人類学的な調査研究に基づいた、「うじぞー」というコミュニケーションツールを生かした地域の方々との交流活動であり、地域での交流活動である。

(2) 地域イベントへの参加ーパネル展示とワークショップ

地蔵の写真撮影と所在地特定による地蔵盆マップの作成と地蔵盆調査が進行していた頃、それまでも色々と商店街と地域の関わりについて考えてきていたJR宇治駅前の宇治橋通り商店街の方から、「宇治橋通りまると文化フェスタ」というイベント企画の相談を受けた。これまで商店街振興組合が主催していた秋祭りに実行委員会方式を導入し、地域と協働で実施し、地域に開かれた企画にしていきたいということだった。これを受けて、私は、できるだけ多くの学生が770メートルの商店街全体を舞台として、日頃の活動を報告する形で参加できる方法を検討した。

そこで行きついたのが、サークル活動を紹介するステージ発表、うじぞー組の調査研究を地域に還元するための展示とワークショップであった。ゼミで商店街の個性店づくりに取り組んできた本学文化人類学科

橋本和也教授のゼミにも展示企画に参加してもらった。また学生の何人かは、実行委員会のメンバーとなり、私自身もオブザーバーとして実行委員会の端に身を置いた。

まず、地蔵盆調査の結果を地元の方々に、また地域外の方々にも広く知っていただくためのパネル展示を考えた。しかしそれだけでは、フェスタの企画としては不十分であり、また字を読めない子供たちには全く意味のない企画になってしまう。そこで大人も子どもも参加できる企画として、「うじぞーとあそぼう」というコンセプト(写真1)で、石に地蔵を描く「石地蔵づくり」(写真2)、絵を描けない低年齢の子供たちも参加できる「地蔵ぬりえ」のコーナーを設けた。路上にシートを敷いて、揃いの手作りうじぞーTシャツを着たうじぞー組の面々がワークショップを展開した。調査した地蔵ファイルをサンプルとして、民俗知識に触れながら、子供達が自らの想像をふくらませ、創造力を発揮して描いていく。結果としては、「世界にひとつだけのMy 地蔵」が出来上がり、子供だけでなく大人の方々も楽しんで地蔵を描き持ち帰ってくださった。また出来上がった塗り絵は、地蔵盆の祭壇を再現したパネルに貼り付け



写真1 「うじぞーとあそぼう」
(2003年10月25日宇治橋通り文化フェスタにて)



写真2 子供を中心に世代を超えたワークショップ交流



写真3 完成した塗り絵を地蔵盆の祭壇にまつる

飾られた（写真3）。

その横のテントでは、「中宇治地域のお地蔵さん展」と題した地蔵盆調査結果の概要を紹介したパネルを展示した（写真4）。調査をさせていただいた町内の方々を始め、宇治市内各地、また遠方からの文化フェスタ来場者も、大勢見に来てくださった。他の町内の地蔵盆の様子を見る機会はないということもあって、熱心に質問をしてくださる方、改めて色々な情報を寄せてくださる方もいた。また多くの方が「お地蔵さんって、面白いね」「こんな今まで見たことないわ」「京都市内とは、また違うね」などと、感想を寄せてくださった。このような反応にふれ、調査結果をオープンスペースに持ち出すことで、新しいコミュニケ

ーションが生まれることが実感された。

宇治橋通りまると文化フェスタに参加することで、学生たちの「うじぞーさん」という地域文化資源についての発見が、地元の方々による地元地域の再発見、地元外の方々の中宇治地域のあるいはその方々の地元についての再発見につながった。また、再発見と出会いをキーワードに、子ども、親、祖父母といった異なる世代をつなぐ場を提供することができ、そこに交流空間が生まれたのである（図6）。

（3）報告書の作成と地元への配布

文化フェスタ終了後、地蔵盆調査の報告書の作成にとりかかった。これまでのフィールドワークの授業の報告書作成の際も同様¹¹⁾であるが、地元にお返しをする調査報告書の作成には、作成過程での地元の方々とのやりとりが不可欠である。

メンバーから寄せられた草稿に手を入れ、かなりの書き直しを経て、地元の方々のお手元にお届けした。間違いをご指摘いただいたり、不明な点についてさらに質問させていただいたりした。報告書の主旨は、2003年8月に実施された4つの町内の地蔵盆を、その時点での記録として整理することであった。それは、たとえば地蔵盆行事といういわゆる地域の「伝統」行事であって

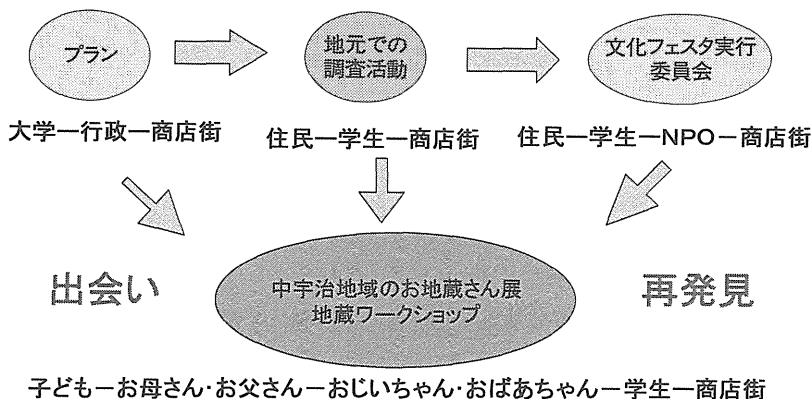


図6 宇治橋通り文化フェスタにおける交流のしかけ

も、時代の流れの中で変化している。その変化も含めて、詳細に記録しておくことが、私たちに出来ることだろうと考えた。そのため、客観的な視点から学問的に地蔵盆の歴史や慣行を分析するといった性質のものにはしなかった。またそのような作業は、研究を開始したばかりのメンバーには手に余る作業であったことも事実である。そこでその代わりに、学生主体の自主活動であることを生かして、若者世代のメンバーたちが地蔵盆行事に参加させていただいて感じたことなどを素直な感想として掲載することにした。また、文化フェスタでの活動も報告書に含めることにした。

何回かのやりとりの中で、地元の方々には、大変丁寧なご指導をいただき、感想を寄せてくださる方もいらっしやっただので、可能な場合には、その感想も掲載させていただいた。この感想の掲載のように、できれば調査に携わった側だけでなく、報告書そのものを地域での協働作業の成果として作成できるようになることが今後の課題である。

報告書完成後は、各町内の希望に応じて、町内会役員、全世帯に報告書を配布させていただいた。地元紙にも好意的に取り上げていただいたので、町外からの問い合わせもあり、メディアの発信力を再認識した。ただし、地域文化資源としてのお地蔵さんを再発見する一助となり、私たち自身が地域のコミュニケーションツールとなれたかどうかは、今後のこの活動の継続と地元での受け止められ方にかかっている。

なお、報告書を作成するということ、その報告書に書かれた内容が「正統なもの」になってしまう固定化を生むということには、今後一層の配慮が必要だと考えている。それは、子供が少なくなって大人だけの地蔵盆になっている、それでも形を変えながら継続している町内があるといったことを、変化に対応している生活者の工夫として捉えたいと考えている私たちの研究

の方向と矛盾する部分を孕んでいる。とくに、祭壇のお供えや飾りつけの様子が写真や図で示されることによって、その年度のものが、それ以降の行事の範として扱われるようになることもあるので¹²⁾、あくまでも当該年度の記録であるという記述を明確にしなければならないと思う。またそのことが、地域の方々の創意工夫を妨げるようなことがないように注意する必要もある。このような、文書化による儀礼内容（またはあらゆる民俗知識）の固定化、という問題は、人類学者（や民俗学者）が調査報告書を執筆する際には、必ず大きな問題になる。私自身、まだこの問題についての解答がでておらず、今後の活動の中でこの点を深く意識し、どのような形で研究成果を社会に還元していくかを課題として持ち続けていかなければならないと考えている。

9. 交流から、混流へ

地域に関わる取り組みを実践している大学は、たくさんある。高谷（2004）も、滋賀県立大学での地域文化研究の取り組みの持つ意味を学生個人の教育を含んだ、ゼミという大学の組織の運営、地域活動の実践、そして大学広報という3つの柱を共に成功させる試みについて論じている。その取り組みの産物である『人と地域』という手づくりのフォーラム誌は、書き手と調査研究対象者の関係が良く見える等身大の中身を備えており、私も以前から愛読させていただいている。その手法は、地道に地域での調査研究を深める取り組みと、学生自身の人としての成長が結びついている点で大きな成果をあげている。

大学の研究室による商店街のまちづくりの取り組みとしては、「ほんまちラボ」（片寄2002）の事例はとても刺激的で参考になる。建築学を背景とするまちづくりの取組みなのでうじぞう組の取組みとは視点の違うところもあるが、常態的に学生が商店街

に存在する、という継続性を備えた試みからは、今後のうじぞー組のひとつの展開の可能性のヒントが得られる。

ただこの「継続性」という問題をまちづくりのなかで、どう位置づけていくかは、それぞれの状況に応じて慎重に検討されなければならないだろう。というのは、現在は旧来の共同体のように、成員の義務が厳格で、逆に成員でない人は関われない、というタイプの集団は好まれず、それぞれが果たさねばならないという役割意識に基づくものではなく、趣味的にもう少し気軽に参加できるような場が必要とされているように感じるからだ。これは、公共性の議論では、中間集団の可能性をどう考えるかということになるだろう（佐々木・金2002、竹沢1997：103）。あるいは集団として捉えられる以前のもっと萌芽的な状況、つまり「場」への注目から考えなければならないかもしれない。その意味で、うじぞー組のイベントにおける一過性の展示やワークショップの試みは、場の持つ一過性ゆえに可能になるような質のつながりを生み出したのではないだろうか。

小馬（2000）は、文化人類学的な贈与と交換の概念を論じる際に、祖父に対して3歳の孫が差し出した握手を例にとり、交換する際の人と人の「触れ合い」の大切さを述べている。交換はつながりを生む。従来の交換論では、その行為が体系化されている際のコードの解明や、交換行為によって生まれる関係性の継続に力点が置かれていた。しかしこの今馬の一瞬の「触れ合い」への注目は、交換される財の中身が社会的通念に適っているかどうかを重視しがちな私たちに、それを超えるところにも触れ合いという交換の喜びがあることを教えてくれる。そして私たちは、交換によってつながり、その喜びを共有した手は、絶対に離してはいけないというものではなく、交換して物を渡した後には手を離しても失礼にはあたらないのだ、ということに気付かされる。

このような交換の「接続的」性格を生かすことの出来る場所を私たちは必要としている。それは、ニュータウンでの共用空間の再生、軒先ショップの試み、記憶共有プロセスの共有などの試みで実現されるかもしれない。そして、うじぞー組のワークショップは、その実践の一つだと考えている。

石の地蔵づくりやぬりえ作業は、「遊び」の要素が強く、文化を紹介する活動としては適切ではないという批判を受けるかもしれない。だがお地蔵さんワークショップは、石に触り、色を塗るという身体感覚を通じて、子どもたちが「ごっこ遊び」を通じて社会の様々なルールを学ぶように、お地蔵さんという地域の文化に親しみを感ぜてもらうしかけを提供することを意図している。またこの作業は、調査研究資料で示される実際のお地蔵さんをもとに、それを模倣し、自らの創造性を発揮する体験であり、そのプロセスは学生にとっても、子どもにとっても、また大人にとっても、楽しい発見に満ちている。そして、そこにはすでに既存のものとは異なる新しい文化の芽が生まれているかもしれない。

同時に、このワークショップを、その文化が根ざしている「土地」で実施していることにも深い意味があると考えている。多くの民族舞踊や民族芸術がそうであるように、ある文化的要素が「土地」から離れ紹介される時、その文化は脱土地化された「アート」となり資本主義的な論理回路に回収され消費されてしまう。うじぞー組の取組みもメディアを通じて外部に発信され、そのメディアによる注目が一層地元での関心につながっているという外部回路との接続の重要性は否定しないが、文化についての新たな意味がその「土地」に返され続ける回路が存在してこそ、外部回路との接続に意義がある。

ところで、これまでの交流概念では、異なるものの出会いと交換については注目されてきたが、それを担う単位そのものが解

体される、あるいは再編されることは前提としていないようだ。しかし、うじぞー組の取組みは、学生たちが地域の宝であるお地蔵さんについて学ぶだけでなく、地域にもお地蔵さんの新しい意味づけを投げ返している。そこには交流の一步先にある新しい創造の可能性＝混流があるように思う。この混流という語は、文化と文化が混じりあい、その意味が攪乱され、そしてそこから新しい流れが生み出される、その可能性をあらわす言葉として用いたい。それは、よそ者である新住民と従来からの旧住民が混じって暮らす「混住化」のように継続性は持たないけれど、混住化が地域の活性化に新たな可能性を開く可能性を持つように（菅1998）、意味の創造による隙間を作り、より多くの外部の人間がその文化に関わる流れを開くのではないだろうか。

お地蔵さんは土地に根付いた意味を持ち、町内会や尼講という共同体的組織によって担われている。従来の文化人類学的研究は、その共同体を捕捉し理解すること、あるいはその共同体の変化を説明することに寄与してきた。しかし共同体の側は、外部から関わるよそ者に説明してもらった役割だけを求めているわけではないだろう。今後文化人類学の立場から、地域政策やまちづくりに関わっていくとすれば、このような従来の研究方法を踏まえたうえで、さらにそこに参与する方法や工夫を考え具体的な実践を重ねていくことが望まれる。本論は、その第一歩としての試論である。

<参考文献>

- 鵜飼正樹・高石浩一・西川祐子 2003『京都フィールドワークのススメ あるく・みる・きく・よむ』昭和堂
- 潮木守 2004「交流」『青少年問題』51巻第2号 pp.2-3
- 片寄俊秀 2002『商店街は学びのキャンパス』関西学院大学出版会
- 後藤和子 2001『文化政策』有斐閣
- 小馬 徹 2000『贈り物と交換の人類学』（神奈川大学評論ブックレット9）御茶ノ水書房
- 佐々木毅・金泰昌編 2002『中間集団が開く公共性』東京大学出版会
- 篠原聡子 2004「赤羽台団地の共用空間と住民ネットワーク」『ニュータウンにおけるジェンダー変容』（平成13-15年度科学研究費補助金研究成果報告書：課題番号13837036）pp.11-24
- 菅 康弘 1998「交わることと混じることー地域活性化と移り住む者ー」、間場寿一編『地方文化の社会学』世界思想社
- 杉万俊夫（編著）2000『よみがえるコミュニティ』ミネルヴァ書房
- 杉本星子・森正美（編著）2002『平成13年度野外調査実習報告書 京都府峰山町』京都文教大学人間学部文化人類学科
- 地域政策研究会編著 2002（森正美分担執筆）『地域づくりのあり方について』『平成13年度京都府地域づくり推進調査事業報告書』、pp.4-28、44、47-49、62-64
- 中川幾郎 2001『分権時代の自治体文化政策』勁草書房
- 西川祐子 2003「ポスト近代家族とニュータウンの現在」『思想』955号、pp.237-28
- 西川祐子、杉本星子、森正美 2003年「ニュータウンの人類学」の可能性『人間・文化・心』京都文教大学人間学部研究報告第五集、pp.65-86
- 高谷好一 2004『地域学の構築』サンライズ出版
- 竹沢尚一郎 1997『共生の技法』海鳥社
- 森正美（編著）2003『峰山 文化資源の発掘』（2002年度森ゼミフィールドワーク実習報告書）京都文教大学人間学部文化人類学科
- 森正美 2004「ニュータウン子育てライフの変遷」『ニュータウンにおけるジェンダー変容』（平成13-15年度科学研究費補助金研究成果報告書：課題番号13837036）pp.44-59
- 森正美、うじぞー組 2004『うじぞー2003 中宇

治地域のお地蔵盆』京都文教大学人間学部
文化人類学科

矢ヶ崎紀子 2004 「子どもたちが確実にかわる。

農山漁村での実体験と交流活動」『青少年
問題』51巻第2号 pp.10-15

<参考資料>

京都府企画環境部文化学術研究都市推進室2003

「学研地区居住者アンケート」集計資料

「千里の絵葉書を作る会」ホームページ <http://www.arch.eng.osaka-u.ac.jp/%7Elabo3/arc03305/sepp.htm> (2004年10月15日 参照)

中日新聞 平成7年4月28日 生活欄 記事

つくば都市振興財団ホームページ <http://www.tsukubacity.or.jp/> (2004年10月15日 参照)

注

- 1) 本論文は、2004年1月23日に、京都府庁で開催された「平成15年度新政策研究会 パイロット・モデル都市・関西文化学術研究都市豊かな文化が育つ都市計画のあり方研究会」における口頭発表を元に、新たに書き下ろしたものである。参加者からのコメントに感謝する。なお、この際の、「まち」という語は、ある一定の空間とそこに暮らす人々の活動により生み出され継承される「地域」を指すものであり、人口が多い、あるいは賑わいのある「街」のみを指すものではない。
- 2) 「ニュータウンにおけるジェンダー変容」(平成13-15年度科学研究費補助金研究:課題番号13837036)による研究成果は、西川・杉本・森(2003)および森(2004)を参照。現在も京都文教大学人間学研究所共同研究「ニュータウンの未来像」(平成15-17年度)において研究は継続中である。
- 3) 建設計画上、その形状などから、とくに目的を設定されず、使いにくい部分として残された土地。
- 4) 製作に関わった大阪大学の大学院生による、京都文教大学西川祐子ゼミでの口頭発表(2003年)の情報による。
- 5) 千里プロジェクトのアイデアから得た個人的な着想を、別の機会に篠原氏に伝えたところ、すぐに篠原研究室を挙げてこの企画が実現された。
- 6) 子育てネットワークについては、森(2004)を参照のこと。

- 7) 平成15年度から、科学研究費補助金基盤研究(B)(一般)「(人と人を結ぶ)「地域まるごとミュージアム」構築のための研究」(研究代表者橋本和也、課題番号15320123)と連動しながらプロジェクトが進行している。
- 8) 常福町、中新町第一町、中新町第二町、六番町(50音順)の町内会の皆様にお世話になった。記して感謝したい。
- 9) 伍町、鷺の橋町、桜町、大工町(50音順)の町内会の皆様にお世話になった。また町内会への取次ぎでは、宇治市歴史資料館学芸員坂本博司氏のご助力を得た。記して感謝したい。
- 10) 2003年時点では、参加人数が10人程度の小さなグループだったので、「うじぞー班」と称していた。2004年になり、1年目の実績を踏まえ、新しいメンバーも加わったので、学生たちが自称を「うじぞー組」に昇格させた。
- 11) たとえば、京都府中郡峰山町(当時、現在は京丹後市峰山町)におけるフィールドワーク実習の報告書、杉本・森(2002)、森(2003)などがそれにあたる。
- 12) 実際に、私自身も、2002年度に作成した峰山町の旧町内の秋祭りの記録を記載した報告書(森2003)について、地元から次年度の役員の参考資料として使用したいという申し出を受けた経験がある。

ABSTRACT**The Value of Exchange Activities****Anthropological Method of Participation in Community Vitalization****Masami MORI**Keywords : exchange, Uji, *jizo*, workshop, community vitalization

Writing ethnography has been considered a typical way of giving feedback on the outcome of anthropologists' fieldwork in a certain field. The need for exchange activities which can promote communications among different generations is strongly recognized in today's society. In this paper, to connect this need and anthropological study, the author explores the possibility of different methods of giving feedback on the anthropological fieldwork through workshops and local activities. The author also tries to propose the methods as new participating contribution of anthropology toward community vitalization and local policy making.

In the first part, based on the five findings of the anthropological study of new towns in Japan, some proposals for community vitalization are recommended. First is mixing village relaxation and urban conveniences in new town settings. Secondly, small scale individual or group-oriented free market activity and living in cooperative housing are highly evaluated to promote sharing and exchange of experience within the local community. Sharing the memories of the place and creating the common memories is another important aspect of community vitalization. Information network is indispensable for community vitalization.

Ujizo is a newly created term by the combination of Uji and *Jizo* and it means *jizo* in Uji. The study team called *Ujizo* group is composed of Kyoto Bunkyo University students, graduates and other sympathizers from outside. The activities of the group cover three main themes. One is the study on *Jizo-bon* in the central Uji area. The second is participating in community events to share our findings. The third is the publication of the activity annual report and its circulation among local residents. The group utilizes basically anthropological research methods such as interviews and participating observation. Workshops both for children and adults are highly appreciated by the participants of different generations. Panel presentations and a *jizo* stamp rally are also organized for creating opportunities for the exchange of knowledge and experiences related to *Ujizo*.

This activity offers an opportunity for local residents to re-discover the virtues of the local culture such as *jizo* and *jizo-bon*. It also contributes to the exchange of ideas and communication not only between researchers and local residents but also among local residents themselves.